「切り花栄養剤」による花持ち延長効果

野菜花き試験場

切り花を長持ちさせるための方法の１つに「品質保持剤」の利用があります。品質保持剤は生産者が使う「前処理剤」と小売店や消費者が使う「後処理剤」に分けられ、両者を上手に活用することで花持ちが長くなります。ここでは後処理剤について紹介します。「後処理剤」という言葉は一般の人にとってはあまりなじみがないので、品質保持剤を販売している 10 社で協議され、より分かりやすい「切り花栄養剤」と呼ぶことで統一されました。

切り花栄養剤の主成分は糖で、主にショ糖やブドウ糖が用いられています。糖だけでは雑菌が繁殖してすぐに水が腐ってしまいますので、抗菌剤も含まれています。この他、植物ホルモンや界面活性剤、凝集剤を含む商品もあります。

切り花は収穫後も呼吸をしているので体内の糖を徐々に消費し、糖が不足すると花持ちが短くなります。収穫時に糖を沢山蓄えた切り花は花持ち良いですが、糖を活け水に入れて吸収させることでも花持ちが良くなります。さらにトルコギキョウのように蕾の付いている切り花では蕾が大きくきれいに咲くようになります。

この他、抗菌剤の作用で水が腐りにくくなるメリットもあります。温度や切り花の種類など条件によって異なりますが、水だけでは２日程度で水が腐敗する場合があります。切り花栄養剤を使用した場合は雑菌の繁殖が抑えられるため、水替えの手間を減らすことができます。

これらの効果は多くの花で確認されていますので、切り花栄養剤の普及により、花持ち延長と消費拡大が期待されます。

切り花栄養剤の効果

23℃で12日間経過したトルコギキョウ「パピヨンピンクフラッシュ」

担当者	神谷　勝己	電話番号	０２６３-５２-１１４８

試験場だより・知って納得情報へ

野菜花き試験場ホームページへ